

さて、そういうわけで自分一人の会なら、基本的になんの話をするかは当日のお楽しみにさせてもらっている。

だが、たまにだが、大勢の語り手が順番に出るステージに、そのうちの一人として頼まれることがある。

ある時、ある県の語り手のグループの連絡会からメールが来た。

「日曜日の午前中にもものがたりについて一般向けに話してほしい」という講演依頼だった。どういふご縁で依頼が来ても、基本的に日程さえおりあえば、おじゃまさせてもらうことにしている。

「お受けします」と返信した。

そうしたら、今度は「その日の午後に同じ会場で語り手たちが順番に一話ずつ語る会をするので、そちらでもものがたりをひとつ語ってもらえないか」というメールが追いかけてきた。

それなら他の方の語りもぜひ聞かせていただきたいし「喜んで」と、ふたつ返事でひきうけた。

それからしばらくして、今度は「プログラムを印刷するので当日する話のタイトルを教えてください」という手紙が来た。

前はこんなふうでしたと、去年の会のプログラムが添えられている。

参加者の名前と話のタイトルが出演順に並べられている。

うーん。なんの話をするかは例によって、当日ステージに立ってから決めたい。

だが、他の人はみなタイトルをここで連絡するのだろうし、一人一話だから

「〇〇の話・他」というわけにもいかない。

そこで電話でさぐりを入れた。

「全部で何人くらいがしゃべるのでしょうか？」

「7,8人です」

「ぼくの出番は何番目でしょうか？」

「まだ決まっていません」

「持ち時間は何分くらいでしょうか？」

「さあ、別に何分でもかまいませんが」

ぼく以外の出演者は全員地元の人で知人はいない。

ちょっとこまった。

なにをこまっているかというと、この会の主催者にはどうやったら、

いいお話会が作れるかと言う発想が欠けているように思えたからだ。

ただ、それを面識のないぼくがいきなり言うのはさすがに非礼だろう。

だから、自分の想いをどう伝えたらいいか当惑したのだ。

複数の語り手が出るものがたりの会を成功させるには、全員が自分が語りた話を順に語ればいわけではない。

それではただのカラオケ大会になってしまう。

会を成功させるには全体をみまわして、

こまかく気配りする必要がある。

たとえば、以前、図書館でチラシをもらってフラッと聞きにでかけたおはなし会ではこんなことがあった。

出演者が明らかに年齢順なのだ。

若い人から始まってだんだんおばあさんになっていく。

うまい順ではない。

このやり方は会の中に波風をたてない。

だが、お客のためにはなっていない。

最後のおばあさんの話はたどたどしく、最後までたどりつけるかどうか聞いているこちらがドキドキした。

終わってから起きた拍手は、おばあさんがなんとか完走できたことへの拍手だった。

また、出演者がアイウエオ順と言う会にぶつかったこともある。司会者がそう言ったから気づいた。

だが、司会者はそれをもって自分たちの会がさも平等であると強調していたが、これは客としてはどうでもいいことだ。

力のある語り手が、力量が今ひとつの語り手の次に出てフォローするとかだんだんに盛り上げていくとかの、あるべき流れを全然考えていない。

では、大勢が出る時はどういう順番に組むのがいいかというと、これは寄席の定席のプログラムが参考になる。

寄席の出演者は、たいてい前座から始まり、二つ目をはさんで真打が後になる。

多少のこぼこはあるものの、ざっくり言うとまだ経験の浅い若手が先に出て、だんだんキャリアを積んだ達者な人になっていく。

最後の出演者はトリといい、他の人より時間をかけて、それなりにまとまった聞きごたえのある話をするのが普通だ。

これはお客にとっても、噺家にとってもよくできたシステムだと思う。

お客は最初は前座の、あまりうまくない芸につきあわされる。

なぜ、お金を払って入ったのにわざわざ、まるで棒読みのようなへたな若者の話につきあわなければならないかとなるが、この部分はまだ、入場料のうちに入っていないと考えていい。

ここは前座が未来の名人になるために必ず必要な「場数を踏むこと」の場数につきあっているのだ。

語り手が達者になっていくためには、へたでも人前でたくさん語らなければならない。それはわかりきったことだから、みんなで次代の落語文化の担い手を養成するのが寄席の前半のプログラムで、そのかわり、だんだんにうまい人や人気者が出て場を盛り上げ、最後にトリが大ネタをやってお客を満足させて帰す。

「終わりよければすべてよし」というが、最後の人の印象がよければ、会全体の

印象がよくなる。

だから芝居でもコンサートでも最後が盛り上がるようにプログラムを構成するのは当然のことだ。

そこがよければ、客は次回も来ようという気になる。

このことはお話会でもまったく同じだ。

最後の出演者は、お客の全体の印象にかかわる大役だ。

年齢順だのアイウエオ順だのの身内の事情で選んではいけない。

それは民守主義でも平等主義でもなんでもないし、少なくとも来てくれた人を話の楽しさ、おもしろさでもてなそうとする会の姿勢ではない。

ちゃんと客を「ものがたりを聞くのっておもしろいね、また来たいね」という気分にして帰せる人を最後に選ばなければ、ものがたりの会全体の未来がなくなってしまうのだ。